

しい生命を有し活動を有し、たゞその所在が遼遠であつてその形を認むることが出来ぬのであると思つて居たらしい、然もその遼遠な處と雖決して現世界の外ではない、佛教に云ふ様な未來の世界の如きものが此世の中から別に存在して居ると云ふ様な思想は彼等の間には認めがたいのである、之等の證明とも見るべき二三の事實を述べて見やう、此時代の蒙古族の間には盛んに殉死が行はれたものである、成吉思汗の葬送の時に途中で出逢つた人々は片端から斬り殺して殉死せしめたと史に記るされ此頃の旅行家も一樣に此風の盛に行はれたことを記して居る、現今尙ほ之が幾分存續せることも二三此地方旅行家の記して居るところである、そうして成吉思汗に殉死せしめられた時の言葉をラシッドの記するものを見ると「他界に至りて成吉思汗に奉仕せよ」と云ふて居る、獨り人間ばかりではない、馬とか武具とか什器とかすべて彼等の生活に必要なものは皆之を一緒に葬むる、一緒に葬むるのは死者が彼等と同様の生活を續けて居ると思ふからである、目前の彼等の生活は遠い死の國に於ても同様に繰り返して行はれて居ると思ふからである、更に此消息を明かにするものは、その結婚の有様である、一體此頃の蒙古族の婚姻は全然多妻主義である、そうしてその多くの妻妾の中には自分の生みの母親以外に、父の妻妾をも娶ることが許されてある、父の遺産を相續する場合に、その妻妾も同様に相續者のものとなるのである、しかし一方當時蒙古の婦人と云ふものは貞節と云ふ點に於いて大いに賞揚されたものである、甚だ矛盾した話ではあるが、彼等の心情を見ると之れがまた頗ぶる面白いことである、夫の生存中はその妻は全く貞操を守つて殆んど猥りがはしいことは見ることが出来ぬ、即ち貞操を以て鳴つて居る所以である、それにも不拘夫の死んだ後に、普通として夫の子の妻妾となるといふのは解しがたい話の様に思へるが茲に彼等の死なる看念が伴つて居るのである、此の世で一旦夫婦であ